

論文の書き方教育：内容と方法(Ⅱ)

—— 論文とはどういうものか(2) ——

国 崎 敬 一

第1節 課 題

第2節 論文とはどういうものか(2)

2.1 問題領域と問い

2.2 論証とはどういうものか

2.2.1 モードス・ポネンス

2.2.2 その他の推論形式

2.3 事実的な根拠と理論的な根拠

2.4 事実と意見

2.4.1 木下の定義

2.4.2 検討

第1節 課 題

1)

本稿は『松山大学論集』（第19巻第2号，2007年6月）に発表した「論文の書き方教育：内容と方法(I)」の続編にあたるものである。私は、数年前から本学の教育研究助成を受けて、学生にどのように論文の書き方を教えればよいのかを研究してきたのであるが、前論文においてその成果の一部を報告したのである。本稿では、その続きを報告したい。研究の最終的な目的は、本学に本格的で体系的な論文の書き方教育を確立することにある。その第1段階として、本研究において現在日本で出版されている論文の書き方に関する著書を調べ、それらの中から最も優れた内容ののものを見つけ出し、それをもとに本学

学生に教える内容を確定することにした。

2)

ここで、論文を書くということは、いうまでもないことであるが、大きく二つの段階に分けられることに留意しておきたい。論文を書くというのは、なんらかの問題について調査研究し、その成果を研究者仲間（学界）に対して文章化して発表することであるから、論文を書くという作業は、二つの段階に分けてとらえておいたほうがよいのである。一つは、問題を立て、答えを探究し、根拠を付けて一定の答えを出す段階、言い換えれば、論文の中身（contents）を構想する（生み育てる）段階である。もう一つは、そのようにして揃った中身を一定の長い文章へと文章化する段階、言い換えれば、論文を執筆する（書き下ろす）段階である。したがって、論文の書き方も大きく〈論文の構想の仕方〉と〈論文の執筆の仕方〉とに分けられるのである。そして、論文の書き方の教育も、論文の構想の仕方の教育と論文の執筆の仕方の教育に分けることができる。また、この両者を教えるとき、どうしてもその前段階として、論文とはどういうものなのかを教えておく必要がある。というのは、書こうとしている論文というものがどういうものか分かっていなければ、構想のしようも執筆の仕方も分からないからである。というわけで、論文の書き方の教育は、大きく次の部分からなると考えられる。

- (1) 論文とはどういうものか
- (2) 論文の構想の仕方
- (3) 論文の執筆の仕方

3)

さて、このような三つの内容からなる論文の書き方を教えるためのテキストとして、私が調べたかぎり、最も優れたものは、戸田山和久氏の『論文の教室 レポートから卒論まで』（日本放送協会出版部、2002）であった。そこで、私

としては、本学で論文の書き方を教える内容としては、現段階では、この書物に書かれている内容を基本とすることにしたのである。ただ、この著作の内容にも、不備・不足があるので、他の優れた著書や私なりの考察・経験によってその部分をできるかぎり修正し補充して、教授内容を確定することにした。

かくて、本研究の方針は次のようになる。

- (1) 戸田山の記述を検討し、論文の書き方の教授内容として妥当な内容を抽出し、確定する。
- (2) その際、戸田山の記述の不備・不足を修正し、補う。
- (3) 以上の作業を,
 - i) 論文とはどういうものか
 - ii) 論文の執筆の仕方
 - iii) 論文の構想の仕方について行う。

前論文では、戸田山の〈論文とはどういうものか〉についての記述の前半部分の検討まで終わっていた。すなわち、上の〈i) 論文とはどういうものか〉の検討の前半まで行っていたのである。本論文では、このi)の検討の後半を行いたい。

第2節 論文とはどういうものか(2)

1)

本節では、論文とはどういうものかについての戸田山の記述の後半部分を検討したいのだが、読者が理解しやすいように。まず戸田山の記述全体を要約して再掲しておこう(戸田山, 2002, pp.37-50)。

A. (論文の定義)

論文とは次のようなものである。

- (1) 論文には問いがある。

論文とは、「なぜ……なのか」、「われわれは……すべきか」などと
いった明確な問いを立て、それを解決することを目指す文章である。

(2) 論文には主張がある。

- ・問いに対して答えを出し、その答えを主張する。
- ・自分の主張を自分の責任で引き受ける勇気、何ごとかを言い切る勇気が大切である。

(3) 論文には論証がある。

- ・問いと答えだけでは論文にならない。自分の答え（主張）を読み手に納得させるための論証が必要である。
- ・論証とは、自分の主張を論理的に支える根拠を提示して、主張を根拠づけることである。
- ・論文に書けるのは、事実と意見だけである。気持ちを書いてはいけない。感情に訴えて説得するということはしてはならない。

以上まとめると、論文とは、つぎのように定義できる文章である。

- (1) 明確な問いを立て、その問いに対して一つの明確な答えを主張し、
- (2) その主張を論理的に裏づけるための事實的・理論的な根拠を提示して主張を論証する。

B. (補足説明)

- a) 問いも答えもそれぞれできるかぎり明確になっていなければならない。

例えば、「動物と人間の関係をどう思うか」という問いでは曖昧すぎて、論文の取り組む問いにはならない。少なくとも「動物実験は倫理的に許されるか」程度には明確でなければならない。答えも、例えば、「動物実験が倫理的に許されるか、許されないか」ははっきりしていなくてはならない。もちろん、「これこれの条件付きで許される」という答えでもいいのだが、その場合も付帯条件を明確に示しておかなければならない。

- b) 答えは、問いに正面から答えたものでなければならない。はぐらかしはいけない。

例えば、「○○に賛成か反対か？」という問いには「賛成」、「反対」と、「なぜ……なのか」という問いには、「……だから」という具合に答えなくてはならない。

- c) 「問い＋答え＋論拠」以外のことを書いてはいけない。

例えば、その課題を選んだ経緯、自分がその意見をもつに至った事情、その他の「自分語り」などを書いてはならない。

- d) 論文とは自分の考えを普遍化された形で書いたものである。

「主観的な記述を排除すべし」というのは間違いである。論文とはむしろ自分の考え（判断・主張など）を書くものである。自分の考えを記述する、つまり主観的な記述も書くものであるが、必ず論拠を示されていなくてはならない。すなわち、論拠を示さずに自分の考えを書いてはならないのである。

- e) 論文は第三者にチェック可能なものでなくてはならない。

どんな読み手も、筆者の考えた筋道を自分でたどってチェックできなくてはならない。したがって、筆者は自分が利用したり依拠したりした素材（調査、統計、テキスト、先行論文）を読者もチェックできるよう典拠を示しておかなくてはならない。

- f) 論文の形式は一般のルールを守らなくてはならないが、論文の内容、つまりどう主張するか、どう論証するかは、自分で探し、考え、書かねばならない。そしてそれに自分で責任をとらねばならない。そういう意味で論文は「自由に書く」ものである。

2)

前論文では、まず、戸田山の論文のとらえ方を次のようにまとめた。

論文とは次のような文章である。

- (1) 明確な問いを立て、その問いに対して一つの明確な答えを主張する。
- (2) その主張を論理的に裏づけるための事實的・理論的な根拠を提示して論証する。

その上で、この定義の(1)について検討を加え、この規定を論文とはどういうものかの核心を成す規定として採用した。前論文の議論はここで終わっていたのである。

本論文では、この(1)の規定に不備・不足はないか、検討するところから議論を再開したい。

2.1 問題領域と問い

1)

戸田山は論文の定義の(1)で次のように述べている (p.37)。

- (1) 論文には問いがある。

論文というのは、「なぜ…なのか」、「われわれは…すべきか」、「…と…との違いは何か」などといった明確な問いを立て、それを解決することを目指す文章だ。

ここで、論文には明確な問いが必要であることが、はっきりと述べられている。論文における問いの不可欠性・重要性を明確に指摘した点で、この規定は高く評価できる。

ただ一つ物足りない点がある。それは、論文における〈問い〉というものの有り様を、もう一つ踏みこんで分節化してとらえていないという点である。この点については、補っておく必要がある。

2)

論文は明確な問いを立てて、それに明確に答える文章であるが、ここでいう〈問い〉あるいは〈問いを立てる〉というのはどういうものかをよく理解できるようになるには、論文において答えようとする〈問い（問題）〉と〈問題の領域〉とを区別しておいたほうがよい。この点を最初に明確に指摘したのは、管見の及ぶかぎり、澤田昭夫（1997, p.23）である。その述べるところを、私なりに整理して紹介しておこう。なお、澤田は「問い（問題）」を「トピック」と呼んだり「問題」と呼んだりしているが、以下では「問い」に統一した。

- (1) 研究する、書くという仕事の第1の課題は、なにについて研究し、書くかという問い（問題）選びである。
- (2) 〈問い〉選びに際しては、〈問題の場〉と〈問い〉とは違うということに注意しなければならない。
- (3) 論文における〈問い〉というのは、一定の答えを要求するようなく問いでなくてはならない。
- (4) 例えば、「天皇制を問題にする」「福祉国家を問題にする」などによくいうが、この「天皇制」「福祉国家」は〈問い〉ではなく、〈問題の場〉である。それは、この中でほんとうの問い（問題）がかくされている鉱床のようなものである。
- (5) 我々は、この〈問題の場〉から、論文で答えようとする問い（問題）を切り出してこなければならない。例えば、「天皇制は民主主義の発展を阻止するか」「福祉国家は国民の真の福祉に寄与するか」といったように。

3)

このような〈問題の場〉、私なりの言葉でいいかえれば、〈問題領域〉と、〈問い（問題）〉の区別について、戸田山（2002）の直後に書かれた河野哲也（2002）

が、さらに詳しく説明している。それを要約して紹介しよう。なお、河野は〈問題の場（問題領域）〉のことを〈テーマ〉を呼んでいる。

(1) (論文とは何か)

- ・論文とは、あるテーマのもとで問いを立て、それに対して論理的・実証的に論述を展開し、最終的に提出した問いに答えを与える文章である。

(2) (テーマと問い(問題))

- ・テーマとは研究の対象となるある分野ないし範囲をいう。これは、論ずる分野・範囲でもある。例えば、「19世紀後半の日米外交について」とか、「クローン問題をめぐる生命倫理について」などである。
- ・テーマは、「〇〇について」という形で論ずる範囲を示しただけであるから、それだけで論文を始めてしまうと、その範囲内であらゆることを論述できることになる。そうすると、論ずる内容が拡散し、内容相互の関係も不明確になって、結局何を言いたいかわからない論文になってしまいがちである。
- ・そこで、テーマについて、その範囲内で一つの問いを立てる必要がある。問いをたてることは、解答を目指すことであるから、問いを立てれば、論述が最終的にどこに収束していくのが、示されることになる。
- ・例えをあげて説明すると、
「永井荷風の近代日本批判」というテーマを示したとする。しかし、これを示しただけでは、何を論じていくつもりなのか、はっきりしない。そこで、「荷風は、留学していた西洋と比較して、どのような点において日本の近代性に問題があると考えたのか」、「江戸から東京への移り変わりを、どのような点で、まだなぜ否定的に捉えたのか」などのように問いを立てる。こうすれば、どういう目的地へ向かって論

述が進んでいくのかよくわかる。しかも、問いはこの例のように疑問形で書かれていなければならない。

4)

澤田と河野の言いたいところの要点を私なりにまとめると、次のようになるであろう。

(1) 論文を書くとは、明確に問いを立てて、それに明確に答えることである。そして、同じことだが、論文とは、問いを立ててそれに答える文章である。したがって、論文にはそれに対して明確に答えられるような、そして明確に答えなければならないような、明確な問いがなければならない。

(2) 研究するときは、まず、何らかの領域（分野）に知的興味をもつ、問題意識を持つところからはじまる。例えば、〈永井荷風の近代日本批判〉について興味がわく、問題にしたい、その領域のなかに何か研究すべき問題（問い）がありそうな気がする、といった具合に。

この〈永井荷風の近代日本批判〉という領域は、まだ論文において答えるべき問いではない。それは、問題領域とでもいうべきものである。要するに、問題領域とは、その範囲内で論文で答えるべき問いを見つけ出して立てるべき事柄の領域である。

(3) 他方、論文における問いとは、上で述べたように論文においてそれに対して明確に答えられ、答えるべき問いである。これが立てられてはじめて議論はその答えを目指して進行していくことができる。なお、問いを明確に立てるためには、問いを疑問文の形で書いた方がよい。

(4) 大事なことは、問題領域を問い（問題）と勘違いしてはならないということである。問題領域を示しただけで論じていくと、答えという最終的な目的がないので、問題領域の範囲内で様々のことをとりとめなく論

じ、結局何を言いたいのかはっきりしないということになってしまいがちだからだ。

- (5) 論文を書くときは、序論においてまず、問題領域を示し、これによって論ずる範囲や分野を限定する。次に、疑問形で、例えば、「荷風は、留学していた西洋と比較して、どのような点において日本の近代性に問題があると考えたのか」というように、明確で分節された形で問い（問題）を提示しなければならない。

以上の論文における問い（問題）に関する考え方は、妥当なものであるといえよう。戸田山の論文の定義では、このような点が欠けていたので、以上のように補っておきたい。

2.2 論証とはどういうものか

ここでは戸田山の論文の定義のうち(2)の論証に関する規定を取り上げる。まず、その内容を検討しよう。

戸田山は論文の定義を次のようにまとめていた（戸田山，2002，p.41）。

- (1) 明確な問いを立て、その問いに対して一つの明確な答えを主張する。
- (2) その主張を論理的に裏づけるための事實的・理論的な根拠を提示して主張を論証する。

この(1)については、前論文で、妥当なものとして採用することにした。(2)についてはどうであろうか。これを検討しよう。

戸田山は、(2)のようにまとめる前に、次のようにくわしく述べていた。要約して紹介しよう。（pp.38-41）

1) 論文には論証が必要である。

問いと答えだけでは論文にならない。自分の答え（主張）を読み手に納得させるための論証が必要である。

2) i) 論証とは、自分の答えを論理的に支持する証拠を効果的に配列したものである。

ii) 論理的に支持する証拠には、理論的な根拠と事実的な根拠とがある。

上にあげた(2)とこの 1) 2) とをあわせて検討しよう。

まず、1) の〈論文には論証が必要である〉という主張は、当然のことであり、妥当である。

次に、2) i) では論証とはどういうものか簡潔に説明している。しかし、この「論証とは自分の考えを論理的に支持する証拠を効果的に配列したものである」という説明では、論証がどういうものかよくわからない。ii) では論証における根拠には理論的な根拠と事実的な根拠とがあると述べられている。この〈理論的な根拠〉〈事実的な根拠〉とはどういうものか、具体的にどういうものかよくわからない。

戸田山は、同書の第6章で論証について具体的に説明しているので、1) 論証とはどういうものか、2) 事実的な根拠および理論的な根拠とはどういうものか、の2点についてその記述を見ておこう。

2.2.1 モードス・ポネンス

1)

第6章では、まず最初に論証の定義を行っている。それを紹介する。

[定義] 論証とは何か。ただ単に「Aである」と言い張るよりは「A」と

いう主張の説得力を論理的に高めたい。そのためになされる言語行為が論証である。

これは結局、論証とは主張の論理的説得力を高める文章であるということを言っているだけであり、これでは論証がどういうものかいこうに分かるようにはならない。戸田山は、このあとで具体例をあげて、論証とはどういうものか、解説しているので、そちらのほうを見ておくことにしよう。

2)

戸田山は、論証の具体例として次のようなものを提示している (p.142)。

〔気圧計の数値が下がると、じきに雨が降る〕は正しい。

〔気圧計の数値が下がっている〕も正しい。

よって、

〔じきに雨が降る〕が正しいと言える。

そして戸田山は、これを論理学でいうモードス・ポネンス（いわゆる三段論法）という形式の論証の例としてあげているのである。

しかし、この例は、厳密に言えば、因果的な推論であり、純粹に論理的な推論であるべきモードス・ポネンスの例としては適當でない。

3)

そこで、モードス・ポネンスの例として適當なものをあげておこう。

【例1】

〔もし（あるものが）人間であれば、必ず（それは）死ぬ〕は正しい。

〔X氏は人間である〕も正しい。

よって,

[X氏は必ず死ぬ] が正しいと言える。

記号を用いて書くと、次のようになる。ただし、「(あるものが)人間である」をA, 「(あるものが)死ぬ」をBと表記する。

[もしAであれば、必ずBである] は正しい。

[Aである] も正しい。

よって,

[Bである] が正しいと言える。

あるいは、見やすいようにすべて記号にしてみよう。ただし、「もしAであれば、必ずBである」を、 $A \rightarrow B$ と表記し、「よって」を、線 _____ で示す。また、「Aが正しい」を、[A] というように、命題を示すAに [] を付けることで示す。すると、例1は、次のようになる。

[$A \rightarrow B$]

[A]

[B]

あるいは、1行に並べて書くならば、次のように書ける。なお、「よって」を、線の代わりに $\mid \Rightarrow$ で示している。

[$A \rightarrow B$], [A] $\mid \Rightarrow$ [B]

この例がどういう論証か、説明すれば次のようになる。なお、以下に出てくる「命題」とはその内容が真か偽かを定められる平叙文のことであるところで

は理解しておいていただきたい。

まず、[もし(あるものが)人間であれば、必ず(それは)死ぬ]という命題が正しいことを示す。

次に、[X氏は人間である]が正しいことを示す。

この2つの正しい事柄を根拠にして、

[X氏は必ず死ぬ]が正しいことを導く。

これが論証の基本的な形であるというのである。

さて、論証についての上のような戸田山のとらえ方は、このように修正を加えれば、よく理解できるものであり、妥当なものであるといえる。そのまま教授内容として採用してよいものである。

4)

ここで、 $A \rightarrow B$

$$\frac{A}{B}$$

言葉で言えば、

〈「もしAが成り立つならば、必ずBが成り立つ」が成り立っている。そして、「A」も成り立っている。このとき、「B」が成り立つ。〉というパターンの推論規則を、モードス・ポネンスというのである。AやBのところにとどのような命題が入ろうと、上のようなパターンでA、Bが成り立っていれば、決定的にBが成り立つというのである。これは、論理学において最も基本的な妥当な推論規則として認められているものである。いいかえれば、 $A \rightarrow B$ とAが正しければ、その正しさが決定的に100%結論のBに伝わるのである。

したがって、言い換えれば、上の論証は、まず、 $A \rightarrow B$ とAが成り立っていることを示し、これに、

$$A \rightarrow B$$

$$\frac{A}{B}$$

という推論規則（パターン）を適用して、

$A \rightarrow B$ と A という正しい命題から B という命題が正しいことを導くということをしているのである。

ここで、「論証形式」と「推論規則」という似かよった用語（概念）が登場しているので、両者の違いを説明しておこう。

$A \rightarrow B$ という推論規則は、仮に $A \rightarrow B$ という命題が成り立ち、同

$$\frac{A}{B}$$

時に A という命題が成り立つとした場合に、必然的に・決定的に、 B という命題が成り立つという、 $A \rightarrow B$ と A から B への決定的な導出関係（変換関係）をさしている。 $A \rightarrow B$ と A という二つの命題と B という命題との内部的な関係である。 $A \rightarrow B$ や A が現実成り立っているかどうか（真であるかどうか）は、関係ないのである。

他方、 $[A \rightarrow B]$ という論証形式の場合は、

$$\frac{[A]}{[B]}$$

まず、 $A \rightarrow B$ が成り立つ（真である）ことを示し、さらに、 A が成り立つことを示さなければならない。その上で、

$A \rightarrow B$ という、

$$\frac{A}{B}$$

前提命題を正しさが100%結論命題に伝えられる推論規則を使って、 B という

結論命題へと変換し、それが正しいということを示すのである。

2.2.2 その他の推論形式

1) (モードス・トレンス)

戸田山は6章において、妥当な論証形式の代表的なものとして、モードス・ポネンス以外に2つのものをあげている。モードス・トレンスと構成的ジレンマである。これらはどのようなものかみておこう。

モードス・トレンスとは次のようなものである。

[もしAであるならば、必ずBである]

[Bではない]

[Aではない]

記号で書けば、(ただし、「Bではない」を $\neg B$ と表記することにして)

[$A \rightarrow B$]

[$\neg B$]

[$\neg A$]

解説すると、

「もしAであるならば、必ずBである」は正しい。そして、

「Bではない」も正しい。

2つの正しい命題を根拠として、「Aではない」が正しいと言える。

というものである。

さて、この論証形式をよくみると、モードス・ポネンス（と対偶）に帰着することがわかる。それを説明すると、

まず、 $A \rightarrow B$ （もしAであれば、必ずBである）が成り立つとき、必ず、その対偶 $\neg B \rightarrow \neg A$ （もしBでないならば、必ずAでない）も成り立つ（これは、最も基本的な、妥当な推論形式といえる）。例を挙げると、このことはよく分かる。例えば、

「もしあるものが動物であるならば、必ずそれは生物である」が成り立つとき、必ず、その対偶

「もしあるものが生物ではないならば、必ずそれは動物ではない」も成り立つ。

記号で書くならば、

$$\frac{[A \rightarrow B]}{[\neg B \rightarrow \neg A]}$$

となる。

かくて、モードス・トレンスの最初の命題 $A \rightarrow B$ から、対偶によって $\neg B \rightarrow \neg A$ が導かれる。次に、この $\neg B \rightarrow \neg A$ と第2の命題 $\neg B$ を組み合わせると、モードス・ポネンスによって、 $\neg A$ が成り立つことが導ける。記号で書けば、

$$\frac{[\neg B \rightarrow \neg A] \quad [\neg B]}{[\neg A]}$$

このように, $[A \rightarrow B]$ は, $[A \rightarrow B]$ (対偶) と,

$$\frac{[\neg B]}{[\neg A]} \quad \frac{[\neg B \rightarrow \neg A]}{[\neg A]}$$

$[\neg B \rightarrow \neg A]$ (モードス・ポネンス)とを組み合わせたものである。よっ

$$\frac{[\neg B]}{[\neg A]}$$

て, モードス・トレンスはモードス・ポネンス (と対偶) に帰着するといえる。

2) (構成的ジレンマ)

次に, 構成的ジレンマとは, 以下のようなものである (p. 153)。

$$\begin{array}{l} [A \text{ か } B \text{ かのどちらかである}] \\ [A \text{ だとすると, } C \text{ であることがいえる}] \\ [B \text{ だとすると, } C \text{ であることがいえる}] \\ \hline [いずれにしろ, C \text{ である}] \end{array}$$

解説すると,

A か B のどちらかが成り立つことがわかっている。そして, 「もし A が成り立つならば, 必ず C が成り立つ」ということと, 「もし B が成り立つならば, 必ず C が成り立つ」ということが成り立っている。すると, A が成り立った場合も, B が成り立った場合も, C が成り立つことがいえる。

これを, 記号で表すと,

$[A \vee B]$ となる。

$[A \rightarrow C]$

$[B \rightarrow C]$

$[C]$

これは、 A が成り立つ場合、 $[A \rightarrow C]$ （モードス・ポネンス）となり、

$$\frac{[A]}{[C]}$$

B が成り立つ場合、 $[B \rightarrow C]$ （モードス・ポネンス）となる。

$$\frac{[B]}{[C]}$$

つまり、これもモードス・ポネンスに帰着するのである。

このように、戸田山が代表的な論証形式として、モードス・ポネンス以外であげるモードス・トレンスと構成的ジレンマのどちらも、モードス・ポネンス（と対偶）に帰着することが分かった。したがって、モードス・ポネンスを基本的な論証形式を考えておいてよいだろう。

2.3 事実的な根拠と理論的な根拠

事実的な根拠および理論的な根拠とはどういうものか、戸田山の説明をみておこう。

実は、戸田山（2002）は第2章でも、論証形式を説明している第6章でも、事実的な根拠や理論的な根拠がどういうものかを明示的には説明していない。しかし、戸田山の考えをくみとれる記述があるので、それを整理して紹介しよう。

1) (第2章の説明)

戸田山は「動物に権利を認めるべきか」というテーマのレポートを学生が書

くというケースを例にとりて、説明しているのだが、そのなかで学生が「動物実験に反対する」という主張（結論）をもって、それを論証するという場合について述べている。その際、「動物実験は数多く行われているが、そのほとんどが不必要なものである。」（－①）とか、「動物に苦痛を与えることは動物の権利への侵害になる」（－②）といった命題を「論拠」すなわち「結論の根拠」と呼んでいる。そして、①については、「実際に動物実験が数多く行われており、そのほとんどが不必要なものであるという事実」で裏づけなければならないと言っている。

これは、この①の命題「動物実験は数多く行われているが、そのほとんどが不必要なものである。」は、事実を記述している文、正確には、事実を記述せんとする文であるから、その真偽は、それが記述せんとする当の事実が実際にあるのかどうかを確認すればわかるということを、言っているのである。ここから、戸田山のいう「事実的な根拠」とは、〈事実を記述せんとする命題〉で結論の根拠となるもの、のことであることがわかる。

次に、②の命題「動物に苦痛を与えることは動物の権利への侵害になる」については、〈そのことを主張するには、「権利の主体であるためには、しかじかの条件が満たされればよく、動物はその条件を満たしているから、権利をもつ」ということを、根拠として示さなければならない〉と述べている。このように、この②の命題は、その述べている事柄の真偽を直接観察によって確かめられるものではない、つまり事実によって確認できるものではない。そして、別の、正しいとされる命題によって根拠付けるほかないものである。

この②の命題は、事実を述べる文ではないのである。では、何を述べているのか。目の前のいまこの事実、いいかえれば、具体的・個別的な事実ではなく、抽象的・一般的な事柄をのべているのである。この抽象的・一般的な事柄が根拠とされている場合、戸田山はこれを理論的な根拠と呼んでいると考えられる。

2) (第6章の説明)

次に、第6章における記述をみておこう。

ここで戸田山は、先にあげたモース・ポネンスの論証の例を取り上げている。

気圧計の数値が下がると、じきに雨が降る (根拠 1)

気圧計の数値が下がっている (根拠 2)

よって、じきに雨になる (主張)

そして、この根拠 1, 2 自体の裏づけが必要であると述べている。その際、(根拠 2)「気圧計の数値が下がっている」という根拠については、実際にその気圧計を見て確認することで裏づけられると述べているのである。すなわち、この根拠 2 の命題は、その真偽を実際の観察によって確認できるものであると言っているのである。この命題は、明らかに〈事実〉を記述しているものであるから、戸田山は〈事実〉の記述は、述べている事柄の真偽を、その事柄自体を実際に観察することによって確認できるものであると言っていることになる。つまり、事実とは、より正確には、事実の記述とは、その述べた事柄(事態)の真偽をその事柄自体を直接観察することで確認できるものである。

他方、次に(根拠 1)「気圧計の数値が下がると、じきに雨が降る」について、これは「気象学の長くて複雑な論証の結果として得られた」ものであると述べている。つまり、気象学における論証がこの命題が真であることを根拠づけている(裏づけている)と言っているのだ。この命題は、その述べることからの真偽をその事柄を直接観察することによって確認できるものではなく、先行研究においてすでに論証されているか否かによってその真偽を確認できるものである。

この「気圧計が下がると、じきに雨が降る」という命題は、目の前の具体的・個別的なことがらを述べているものではなく、あらゆる具体的なケースにあて

はまる一般的なことがら、 $\dot{\text{不変の}}\dot{\text{パター}}\dot{\text{ン}}$ を述べているものである。この一般的なことがら・ $\dot{\text{不変の}}\dot{\text{パター}}\dot{\text{ン}}$ を述べる命題が〈理論〉である、より正確には（大なり小なり体系的である理論の構成単位としての）〈理（りくつ）〉であると、とらえておくことができよう。

そして、それは学界においてすでに妥当な論証がなされているか否かを確認することによって、その真偽を確認できるものである。

3)

戸田山が第2章と第6章とで述べるところを、私なりに整理してまとめると、次のようになるだろう。

○事実

- 1) 事実とは、実際に起きていること、および起きたことである。
- 2) 事実の記述、あるいは事実命題とは、事実を記述せんとする文である。
- 3) 事実命題とは、その真偽をその事実自体を観察によって確認できるものである。
- 4) 事実的な根拠とは、事実命題である根拠のことである。

○理論

- 1) 理論、あるいは理（りくつ）、いいかえれば、理論命題とは、実際に起きたこと、あるいは起きていること、における一般的なパターンを記述したものである。
- 2) 理論命題は、その真偽をすでに妥当な論証がなされているかを確認することによって、確認できるものである。
- 3) 理論的な根拠とは、理論命題である根拠である。

現段階では、このようにとらえておくことができるであろう。

2.4 事実と意見

戸田山は、論証について説明しているところで、〈論文には気持ちや感情を書いてはいけない。事実と意見だけを書くようにすべきである〉ということを述べている。ここに、事実と意見という対比が出てくるが、これは事実と理論という対比と似ている。根拠の議論では、我々は、〈事実〉と〈理論〉を上のように区別してとらえた。では、〈事実と意見を区別して書くべきである〉というときのこの〈意見〉とは、一体どういうものであろうか。〈理論〉とは違うものであろうか。違うとしたら、どこが違うのであろうか。本稿では、最後にこの問題を検討しておくことにしよう。

2.4.1 木下の定義

1)

実は戸田山は、意見とは何か、理論と同じなのか、どう違うのかについて何も述べていない。この問題、とくに事実と意見の違いについては、木下是雄(1990, pp.24-29)が詳しく明確に説明しているので、それを整理して紹介しておこう。

木下はまず、アメリカの小学校5年生の国語の教科書に載っていた次のような問いからこの問題の議論を始める。

ジョージ・ワシントンは米国の最も偉大な大統領であった。

ジョージ・ワシントンは米国の初代の大統領であった。

この2つの文のうち、どちらが事実の記述か。もう一つの文に述べてるのは、どんな意見か。事実と意見とはどちらがうか。

そして、この問いには次のような注がついていた。

事実とは証拠をあげて裏付けすることのできるものである。

意見というのは何事かについてのある人が下す判断である。

ほかの人はその判断に同意するかもしれないし、同意しないかもしれない。

ここでは、文章を読むとき、どういう文が〈事実の記述〉で、どういう文が〈意見〉か、それをどう見分けるかを問題にしている。そのような文脈で、〈事実の記述〉か〈意見〉かが問題にされている。

木下は、このような議論を導入にして、論文やレポートを書くときに、事実の記述と意見とをどのように区別して書くべきか、そして、その前段階となる議論として、事実の記述とはどのようなものであるか、そして、意見とはどのようなものとしてとらえておけばよいかを論ずるのである。

2)

まず、アメリカの小学校の教科書にのっている「定義」をあげる（上で紹介したが、再掲しておく）。

事実とは証拠をあげて裏付けすることのできるものである。

意見というのは何事かについてのある人が下す判断である。

ほかの人はその判断に同意するかもしれないし、同意しないかもしれない。

木下は、このままでは「大人の世界」では通用しないので、もっと突っ込んで検討しておく必要があるとして、事実の記述とはどういうものか、意見とはどういうものかについて、次のように議論を展開する。その述べるところを、私なりに整理して紹介しよう。

3)

まず、事実の記述と意見をどのように定義しているか、いいかえれば、どのようにとらえているかを紹介しよう。

○事実の記述とは次のようなものである（なお、傍点・ルビは木下）。

- 1) 自然に起こる事象(某日某地における落雷)や自然法則(慣性の法則)；過去に起こった、またいま起こりつつある、人間の関与する事件の記述で、
- 2) しかるべきテストや調査によって真偽（それがほんとうであるかどうか）を客観的に判定できるもの。
- 3) 事実の記述には、真（ほんとう、true）の場合と偽（ほんとうでない、false）の場合があるのである。

そして、1)、2) については次のような例をあげて説明している。

ある本のなかに

ジョージ・ワシントンは米国の初代の大統領であった。

という文があったとすると、この記述は、事実の記述である。なぜなら、この記述は、過去にあったことを記述しており、また、その真偽を歴史資料を調査することで確認できるからだ。

同じ本に、

ジョージ・ワシントンは米国の最も偉大な大統領であった。

という文があったとすると、この記述は事実の記述ではない。なぜなら、〈最も偉大な大統領であるかどうか〉は、判断する人の判断基準によって変わるものであり、テストや調査で真偽を確認できるような性質のことがらではないからだ。

3) について、次のような例をあげて説明している。

ある本の、書物Aに関する部分に

Aという書物の著者は1942年生まれである。

という文があったとする。この記述は、著者略歴やしかるべき名簿を見るなり、あるいは戸籍謄本を調べるなりして、真偽を確認できるから、事実の記述であるが、調べてみると、その著者が1943年生まれだったとすると、この記述は、ほんとうでない、つまり、偽である。すなわち、これは偽なる〈事実の記述〉である。もちろん、1942年生まれであることが確認されたら、これは真なる〈事実の記述〉である。

(ここで、私の考えを付け加えると、この説明から分かるように、〈事実の記述〉という言い方は正確でない。正確には〈事実のつもりで書かれた記述〉あるいは〈事実として書かれた記述〉と表現すべきであろう。) 次に、

○意見とは次のようなものである (pp.26-28)。

1) 一口にいえば、事実に対比すべきものとしての〈考え〉である。

＊事実は、ことばによる記述の対象にはできるが、元来ことばの世界の外のものである。考えは、ことばによって組み立てられるもの、ことばの世界の中にあるとっていいものである。

2) 意見は、幅のひろい概念で、次のようなものが含まれている。

a. 推論 (inference) :

ある前提にもとづく推理の結論、または中間的な結論。

例：彼は（息をはずませているから）走ってきたにちがいない。

b. 判断 (judgment) :

ものごとのあり方、内容、価値などを見きわめてまとめた考え。

例：この短編は彼女の最高の作品である。

c. 意見 (opinion) :

上記の意味での推論や判断；あるいは一般に自分なりに考え、あるいは感じて到達した結論の総称。

例：駅および車内の放送は必要最小限にとどめて、騒音防止につとめるべきだ。

d. 仮説 (hypothesis) :

真偽のほどはわからないが、それはテストの結果を見て判断するとして、仮に打ち出した考え。

・意見の中に数えられるが、仮の意見である。

・ここでテストといったのは、その考えを支持する材料または反証になりそうな材料の吟味を意味する。

e. 理論 (theory) :

証明になりそうな事実が相当にあるが、まだ万人に容認される域には達していない仮説。例えば、進化論。

・ 正当な手続きを踏み、先入観にとらわれずに吟味をおこなった結果がその仮説を支持すれば、仮説は理論に昇格するのである。

＊すべての人が容認せざるをえないほど十分な根拠のある理論は**法則**（law）と呼ばれ——例えば、エネルギー保存の法則——、これは意見ではなく事実のカテゴリーに分類される。人文・社会科学の分野には、理論は存在しうるけれども、いま述べた意味での法則は「ない」と言ってもよからう。

3）問題に関係のある事実の正確な認識にもとづいて、正しい論理にしたがって導き出された意見は、根拠のある意見、妥当な意見——sound opinion——である。

出発点の事実認識に誤りがある場合には、根拠薄弱な意見——unsound opinion——になる。

・ 論文・レポートで意見を述べる場合には、その意見は上記の意味で〈根拠のある〉ものでなければならない。

2.4.2 検討

木下は以上のように事実の記述と意見とをとらえ、定義している。これを検討しておこう。

1)

まず、事実の記述の定義の1）において、事実の記述は、〈自然に起こる事象（某日某地における落雷）や自然法則（慣性の法則）；過去に起こった、またいま起こりつつある、人間の関与する事件の記述である〉と定義している。自然界と人間界とに分けて、自然界に関しては「自然に起こる事象や自然法則」の記述、人間界に関しては、「過去に起こったこと、またはいま起こりつつあること」の記述ととらえたのである。

まずここで問題なのは、〈事実の記述〉は定義はしているが、〈事実〉の定義をしていないという点である。なぜ木下は事実の定義をしなかったのか。木下は、その理由を次のように説明している。

「ある記述は事実だ」という表現は、「ある記述は事実の記述だ」という意味を持っているが、他方で、「ある記述はほんとうだ (be true)」という意味にも受け取られる。「事実」という表現はこのような誤解を生みやすいので、事実の定義でなく、事実の記述の定義をしたほうがよい、というのである。

しかし、これはおかしい議論である。確かに、「事実だ」という表現は、「is a fact」という意味と、「is true」という意味と2つの意味に受け取られる。したがって、もし「事実だ」の定義をするのであれば、この両義性は問題になる。しかし、我々は、「事実」を定義しようとしているのである。「事実」という名詞は、「fact」という意味を持っているだけで、「be true」という意味は持っていない。「事実」を定義しようとするとき、上の両義性は問題にならない。また、定義をさける理由にもならない。したがって、木下は「事実」の定義をしておくべきであったのである。

2)

木下の〈事実の記述〉の定義をみると、そのなかから〈事実〉の定義が読み取れる。それを示すと、

事実とは、

自然に起こる事象や自然法則；過去に起こった、またいま起こりつつある、人間の関与する事件

となるであろう。

これは、事実の定義としておおよそ妥当なものであると考えられるが、二つ問題がある。

3)

一つは、自然法則を〈事実〉のカテゴリーに入れている点である。さきに意見の定義の1)で紹介したように、木下は、事実は〈元来ことばの世界の外のものであり、考え(=意見)はことばの世界の中にあるとっていいものである〉と述べている。事実はことばの世界の外のもの、意見はことばの世界の中のものであるから、相容れないものなのだ。

そして、法則は、「すべての人が容認せざるをえないほど十分な根拠のある理論」である、つまり、「理論」なのだ。ということは、「意見」なのである。ということは、ことばの世界の中のものであり、すなわち、事実には入れられないものである。それを、事実のカテゴリーに入れるのは、妥当でないとわざとざるえない。我々としては、法則を事実のカテゴリーから除外しておきたい。(なぜ、木下がこのような無理をしたのだろうか。おそらく、木下は「事実」と「真実」を明確に分けてとらえていないのであろう。そして、法則をあえて事実のカテゴリーに入れたとき、木下の頭の中で、その「事実」は「真実」という意味にすりかわっていたのであろう。)

4)

もう一つの問題は、事実の定義として、自然界に関しては、「自然に起こる事象」としている点である。人間界に関しては、「過去に起こったこと、または今起こりつつあること」しているのにである。なぜ、「起こる」にしたのであろうか。

「自然に起こる事象」というと、くいついかなる場合においても、当然未来においても、必ず起こる事象〉という意味になる。いいかえれば、〈永遠の相みて必然的に起こる事象〉なのである。これは、自然法則、つまり、永遠の真実に近いとらえ方である。これも、木下が〈事実〉と〈真実〉とを明確に分けてとらえていないことが引き起こした間違いであるといえるだろう。

我々としては、事実を定義するには、やはり、自然界に関しても、「自然界

において、過去に起こった事象、またはいま起こりつつある事象」と定義しておくべきであると考える。

以上まとめると、我々としては、自然界・人間界の区別はなしにして、

事実とは、

現実には、過去に起きたこと、または今起きつつあること

と定義しておくのがよいだろう。そして、

事実の記述とは、

現実には、過去に起きたこと、または今起きつつあることの記述

と定義することになる。

5)

3)「事実の記述には、真の場合と偽の場合がある」については、このままで妥当であると考える。

かくて、事実の記述についての木下の定義は、おおよそ妥当であるが、二、三問題を含んでいた。その点を修正したものを、下にまとめておこう。

○事実とは：

現実には、過去に起きたこと、または今起きつつあること

○事実の記述とは：

1) 現実には、過去に起きたこと、または今起きつつあることの記述であり、

2) しかるべきテストや調査によって真偽（それがほんとうかどうか）

を客観的に判定できるもの。

- 3) 事実の記述には、真（ほんとう、true）の場合と偽（ほんとうではない、false）の場合とがある。

さて、次に木下の意見の定義を検討し、妥当な定義を確定し、その上で、理論と意見とはどう違うのか、そして、〈事実と理論〉の対比と〈事実と意見〉の対比とどう違うのかを論究しなければならないのであるが、紙数も尽きたので、それは次の機会にゆずることにしたい。

参 考 文 献

- アーマー、A., 河内恵子, 松田隆美, スネル, W. (1999), 『アカデミック・ライティング応用編—文学・文化研究の英語論文作成法—』慶應義塾大学出版会
- 逢沢明 (2003), 『京大式ロジカルシンキング』, サンマーク出版
- 猪狩誠也, 杉本忠明 (編) (2003), 『大学で教える小論文の書き方』, インデックス・コミュニケーションズ
- 磯貝友子 (1998), 『アカデミック・ライティング入門—英語論文作成法—』, 慶應義塾大学出版会
- 伊丹敬之 (2001), 『創造的論文の書き方』, 有斐閣
- 江下雅之 (2003), 『レポートの作り方』, 中央公論新社
- 小野俊太郎 (1999), 『レポート・卒論の攻略ガイドブック [英米文学編]』松柏社
- 加藤恭子, ヴァネッサ・ハーディ (1992), 『英語小論文の書き方』講談社
- 上村妙子, 大井恭子 (2004), 『英語論文・レポートの書き方』, 研究社
- 川喜田二郎 (1967), 『発想法』, 中央公論社
- 木下是雄 (1990), 『レポートの組み立て方』, 筑摩書房
- 木下長宏 (2000), 『大学生のためのレポート・小論文の書き方』, 明石出版
- 工藤順一 (1999), 『国語のできる子どもを育てる』, 講談社
- (2003), 『論理に強い子どもを育てる』, 講談社
- 慶應義塾大学通信教育部 (1995), 『卒業論文の手引き [新版] (新装版)』, 慶應義塾大学出版会
- 言語技術の会 (1990), 『実践・言語技術入門』, 朝日新聞社
- 河野哲也 (2002), 『レポート・論文の書き方入門 第3版』, 慶應義塾大学出版会
- 斉藤孝 (1977), 『学術論文の技法』, 日本エディタースクール出版部
- (1998), 『学術論文の技法 第2版』, 日本エディタースクール出版部

- 櫻井雅夫 (1998), 『レポート・論文の書き方 上級』, 慶應義塾大学出版会
- 澤田昭夫 (1977), 『論文の書き方』, 講談社
- (1983), 『論文のレトリック』, 講談社
- 高根正昭 (1979), 『創造の方法学』, 講談社
- 戸田山和久 (2002), 『論文の教室 レポートから卒論まで』 日本放送協会出版部
- 榎木伸明 (2006), 『卒論を書こう (第2版)』, 三修社
- 浜田文雅 (1996), 『文章理解の方法』, 慶應義塾大学出版会
- 二木麻里, 中山元 (2001), 『書くためのデジタル技法』, 筑摩書房
- 野口悠紀雄 (2002), 『「超」文章法』, 中央公論社
- 速水博司 (2003), 『大学生のための文章表現入門【演習編】』, 蒼丘書林
- 樋口裕一 (2002), 『やさしい文章術 レポート・論文の書き方』, 中央公論新社
- (2005), 『できる人の書き方』, ビジネス社
- 保坂弘司 (1978), 『レポート・小論文・卒論の書き方』, 講談社
- 水野麻里 (2004), 『プロの書き技』, 新風舎
- レメニイ, D. (小樽商科大学ビジネス創造センター (訳)) (2002), 『社会科学系大学院生のための研究の進め方』, 同文館出版
- ロシター, P., 東京大学教養学部英語部会, *First Moves: An Introduction to Academic Writing in English*, 東京大学出版会
- 鷺田小彌太 (1999), 『入門・論文の書き方』, PHP 研究所
- 鷺田小彌太, 廣瀬誠 (1994), 『レポート・論文はどう書くか』, 日本実業出版社
- Roth, Audrey J. (1966), *The Research Paper, Form and Contents*, Belmont, Calif.

* 本論文は 2006 年度松山大学教育研究助成による研究の成果の一部である。記して謝意を表したい。